川崎賢子（清華大学日本研究センター客員研究員）

連載 17 小津安二郎『一人息子』（1936 年）の音

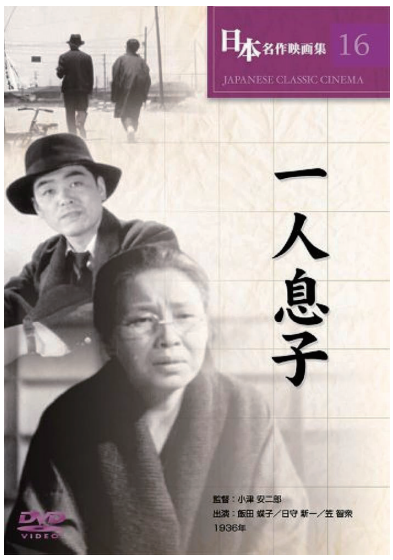
待望の小津安二郎のトーキー劇映画の第一作目は、『一人息子』だった。冒頭には、フォスターの「オールド・ブラック・ジョー」のメロディーが流れ、ついで芥川龍之介「侏儒の言葉」からの「人生の悲劇の第一幕は親子になつたところからはじまつてゐる」という文言を掲げて、幕が開く。

トーキー『一人息子』は、俳優が声を出すだけではなく、歌が流れ、フレームの内外の音が拾われているだけではなく、あらゆる物音が意識化され、意味を担っている映画である。

信州の山村で、小学生の息子を育てている母親（飯田蝶子）の周りには、時計の音、足音、製糸工場の糸車の音がする。忙しなく労働に駆り立てる音である。家に帰れば、夜なべして石臼を回す音もする。母一人子一人の貧しい暮らしを、教師（笠智衆）が尋ねてくる。（旧制）中学への進学を息子が希望すると言ったからである。母は寝耳に水である。教師は、よくぞ決心した、これからは教育を受けなければだめだ、こんな田舎にいてはだめだ、東京に出なければだめだ、自分も東京に出てもっと学ぶつもりだと、熱弁をふるって帰ってゆく。貧しい母は、当初、息子を嘘つきとなじり叱りつけるが、やがて思い直して進学を許す。

10 年余りの歳月が流れる。母が働く工場の機械は新しくなっている。母は東京に息子を訪ねる旅に出る。息子は東京市役所の官吏になっているはずだった。ところが、実際には夜学の教師をつとめている。母をもてなす金がなくて同僚に借金する。住む家も、東京の町外れ、町工場の機械音が終日響く安普請の家である。母に知らせずに結婚しており、幼い子どもまで居た。

母の失望は深い。息子の進学の背中を押した元教員の家を母子で尋ねると、「とんかつ」の旗をひらめかせ、商いを手がけており、売り物を「ちゅうちゅうたこかいな」と繰り返して数えている。声、擬態語、オノマトペが哀れでもありおかしみをも誘う。学問への野心や、近代的な生活への希望にあふれていたはずの元教員は、科学的な思考や合理主義はどこへやら、幼い子どものために夜泣きのおまじないの札をくれる。赤ん坊の泣き声も、トーキーが表象する重要な音である。



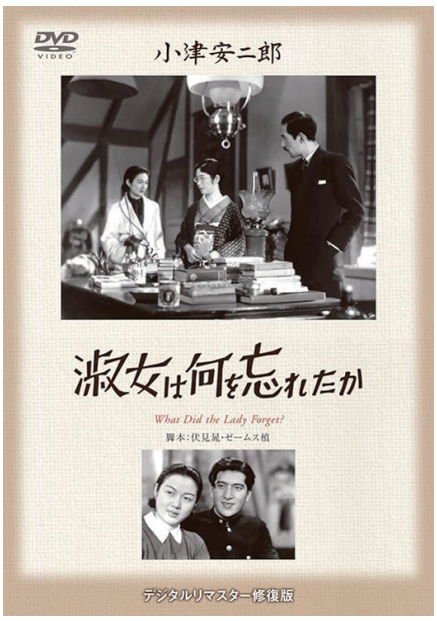
『一人息子』（1936）DVD 版ジャケット

それでも息子はせいいっぱい母を楽しませようと東京見物に連れ出す。映画館では音楽映画『未完成交響楽』を観る。息子は母に「これがトーキーっていうんですよ」と解説する。トーキー映画のなかに引用されたトーキー映画。メタフィクションの過剰性が面白い場面だが、母は興奮するわけでもない。家に帰るとどこからともなく響く屋台ラーメンのチャルメラの音、息子は母にラーメンをおごる。

夜は長い。母は、このままではいけないと息子をかきくどく。息子は、これが東京なんだ、東京で生活することはなまやさしいことではないんだといいつのる。母は、息子の学費のために田畑も家も売り払い、今は工場に住み込みでいることを伝える。その長い親子の口説きや愚痴も、そして泣き出す妻、母、赤ん坊の夜泣きも、皆トーキーでなくては表現できなかった意味ある音の表象に違いない。中澤千磨夫「痙攣するデジャ・ヴュ ── ビデオで読む小津安二郎」（『北海道武蔵女子短期大学紀要 Memoirs』33 号、2001 年）は、その翌朝の場面で、隣家の少年が口ずさむ歌が、この年発売禁止処分となった渡辺はま子の「忘れちゃいやよ」の冒頭であることに注意を喚起している。

映画ファンは、小津安二郎のトーキー映画がどのようなものになるのか、ジリジリと待っていた。横手五郎「小津とトーキー」（『キネマ旬報』1936 年 10 月 1

日）では、「サイレント映画最後の騎士、小津安二郎がいよ／＼トーキーに進出した。長い間の懸案がやつと解決された感じで、われ／＼見物の側も肩の荷が下りた」と書いた。小津は翌年『淑女は何を忘れたか』を撮り、そして、日中戦争に応召された。



『淑女は何を忘れたか』（1937）DVD 版ジャケット